

特別日本語A読解クラスの授業報告

—2007年度と2008年度クラスの比較検討—

江崎 裕子

本稿はICU日本語教育課程において筆者が2007年度（2007年秋学期～2008年春学期）と2008年度（2008年秋学期～2009年春学期）の2年間に渡って担当した、特別日本語Aクラスの読解授業の報告書である。筆者は以前にも数回当該クラスを担当した経験があるが、本稿で報告するクラスは2年度とも、1年を通して読解授業を担当出来たため、学生の実力や伸びを見ながら指導内容を調整していった。ことに両年度の冬学期と春学期において2回実施したブックレポートは、資料や作品の選択、分析や発表のポイントなどをその時の学生の実力に応じて、より効果的な方法を模索しながら実施した。この2年間の授業内容と結果を比較検討することにより、当該クラスにおける読解授業のあり方を考察するのが本稿の目的である。

1. 学生人数と背景

2007年度、秋学期21名、冬学期20名、春学期18名。（各学期とも2セッション）

2008年度、秋学期18名、冬学期19名、春学期18名。（同上）

学生の内訳は大きく帰国生とインターナショナルスクール出身者に分けられるが、その中でも、帰国生の海外滞在年数や日本語学校への登校年数と受けた日本語教育の内容、また家庭における日本語使用の程度など、日本語教育受容の背景は多種多様である。

2. 秋学期の授業

2. 1. 目的

漢字・書き方・読解の全てを含めた、特別日本語全体の授業目的は、大学生として必要な漢字語彙力・読解力・文章構成力・発表力の基礎を身につけることである（廣瀬他1996）。読解においては、漢字・語彙・表現の知識の拡充を図り、読んだ物のキーワード、段落の要点、全体の内容、書き手の主張を正確に把握し、さらに自分の意見をまとめて他の人に伝えることが出来るようになる、というのが主眼である。1年間で一般の大学生の日本語力に到達するのが目標であるが、1学期目なので、その基礎を固めるということである。

漢字の授業が1コマでいくつの漢字を教えるかという、いわば数量で計れる授業計画を立てられるのに対し、読解授業は学生が上記の目的のどこまで到達しているか、様子を見ながら進めていく必要がある。しかし、たとえ教材の漢字が難しくて読むのが大変だという学生が数人いたとしても、目標達成のためには全体のレベルは落とさないことを念頭に置いて授業を進めなければならない。なお授業時間は各学期とも、特別日本語Aクラス週3コマの内1コマが読解の授業である。

2. 2. 授業で扱った教材

2. 2. 1. 2007 年度秋学期

- ①新聞記事『『ネットカフェ難民』5400人』日本経済新聞 2007 年 8 月 28 日夕刊
- ②エッセイ「学習とは文武両道である」(『まともな人』養老孟司)
- ③小説「なめとこ山の熊」(宮沢賢治)
- ④学術書「東と西の語る日本の歴史」(網野善彦、一部抜粋)
- ⑤新聞記事「こども・脱・いじめ一かけがえない『自分』」朝日新聞 2007 年 9 月 16 日朝刊
- ⑥エッセイ「通訳と翻訳の違い」(『米原万里の「愛の法則」』米原万里)

2. 2. 2. 2008 年度秋学期

- ①新聞記事「天声人語」朝日新聞 2008 年 7 月 26 日朝刊
- ②新聞記事「若者祖父母をリスペクト！」日本経済新聞 2008 年 9 月 4 日夕刊
- ③エッセイ「学習とは文武両道である」(『まともな人』養老孟司)
- ④小説「なめとこ山の熊」(宮沢賢治)
- ⑤学術書「東と西の語る日本の歴史」(網野善彦、一部抜粋)
- ⑥エッセイ「通訳と翻訳の違い」(『米原万里の「愛の法則」』米原万里)
- ⑦小説「道草」(『陰日向に咲く』劇団ひとり)

2. 3. 授業内容

様々なジャンルの読み物を読みながら、漢字、語彙、表現、構成、内容を学んでいくために、短く、まとまりがあり、且つ考えながら理解を進めるに相応しい基本的な教材を扱った。2007 年度と 2008 年度はほぼ同じ資料であるが、新聞記事だけは時事問題を学ぶ必要性から、両年度とも出来るだけ新しい記事を扱うように心がけた。具体的には、学生の日常生活に関係のある『祖父母』や『いじめ』に関する新聞記事、『学習とは』、『通訳と翻訳』、『日本の東と西』に言及したエッセイや学術書など扱いやすいテーマを選んだ。

授業の準備としては、翌週の授業で扱う資料とワークシートを 1 週間前に学生に配布しておく。学生は事前に一人で十分資料に目を通して、ワークシートに出題された問題に答えを出しておく。また、授業開始時に資料に書かれている漢字語彙の読み方のクイズを実施するので、学生は漢字の読み方も予習しておかねばならない。これらは学生が今後一人で日本語の文章を読み続けていくために、難しい漢字・語彙・表現があったら自分で辞書を引いて調べ、文、段落、章、書物全体を通して、書き手の主張は何であるかを理解しようとする姿勢を養うための練習である。

実際に学生はワークシートもクイズ対策も入念に準備して授業に臨んだ。読み方クイズは書きの出題がないので勉強しやすいからか、いい点数を取る学生が多い。しかし、このクイズで苦しむ学生も数名おり、これらの学生には学期初期の段階できめ細やかな指導が必要であることに気づかされる。ワークシートは、学生にとって資料の背景を調べたり、記述内容全体について考えてみるのが重要なものであり、個々の質問が難しく

て正解がわからなかったという部分があってもかまわない。けれども実際には、学生は教師の期待以上に真摯に考察して丁寧な答えを書いてくることが多かった。学生の文章は学期の初めと終わりを比較すると格段の上達が見られる。

当日の授業はこれらの準備を前提にして行う。ジャンルと資料の内容によって、授業の進め方は多少異なるが、筆者が特に心がけた点は3つある。第一は本文の意味を正確に把握して読むこと。第二は本文を上手に音読すること。そして第三は、書き手の主張に対し、必ず自分の意見を述べることである。学生は②回目以降は予習をして授業に臨んでいたので語彙、文章レベルの大体の意味は掴んでいたが、新聞記事以外は書き手の表現が個性的であったり専門的な内容であったりしたため、クラスで丁寧に読み進める必要があった。

2. 4. 指導上の問題点

秋学期における読解の力とは、まずは漢字をどのくらい読めるかが基本となるが、2007年度のクラスは学生間に大きな実力差があった。そのため、一人では予習ができない学生たち数名には個別のサポートが必要であった。反対に、一部の実力のある学生たちは予習を独力で十分にこなしてくるだけでなく、授業中の内容理解後の意見発表や問題提起が非常に積極的であった。その結果、漢字の苦手な学生たちも物事を深く考えたり進んで意見交換をすることができ、全体としては終始活気ある授業が多かった。

一方、2008年度の学生たちは初期の段階で大きな実力差は見られず、特別に予習を手助けた学生もほとんどいなかったのだが、特に目立ってクラスを引っ張る学生もいなかった。アウトラインと書き手の主張は把握したものの、文章を読んでも何の感想も持たず、疑問も抱かないというまま授業が終わってしまうこともあった。教師と学生との間の信頼関係や自然な心の交流がなかなか生み出されなかったのも原因であろう。2008年度の⑦回目の教材「道草」はホームレスを題材にした取り組みやすい小説であるが、この教材を扱った授業でやっと学生が目をは輝かせて本音を語り始めたような気がする。授業の教材選択がいかに重要であるかがわかる。

2. 5. 学生からの評価

コースエバリュエーションによると、2007年度は「最初は自分たちのレベルより高すぎたが、後半は自分たちのレベルに合ったものになった」や「難しかったが、ためになった」など教材選択への評価が多い。2008年度は「毎週日本語で文を読む訓練をすることで、大変勉強になる」、「習わないといけないものだと思います、しっかりできたから、よかった」や「いろいろな記事を読めて楽しかった」など自らを叱咤激励する姿勢や幅広い教材を受け入れる心構えが見られる一方、「教師の質問が曖昧で答えにくいことがあった」という批判もあり、適切な指導が欠けていた点も指摘された。

両年度とも、ディスカッションが非常に楽しかったという感想が多かった。

3. 冬学期の授業

3. 1. 目的

秋学期に培った読解の基本的技能を強化する。特に資料の要点、書き手の主張を把握し、それらに対する自分の意見や感想を述べたり文章に書いたりできるようになることに重点を置く。学期後半には、個人が責任を持って各担当文献を読み発表するブックレポートを取り入れる。

3. 2. 授業前半で扱った教材

3. 2. 1. 2007 年度冬学期

- ①新聞記事「天声人語」朝日新聞 2007 年 11 月 24 日朝刊
- ②評論「発明の対価」（『日本の論点 2004』中野不二男）
- ③対談「脳を侵す環境ホルモン」（立花隆他）
- ④小説「鼻」（芥川龍之介）
- ⑤⑥⑦学生のブックレポート（後述）

3. 2. 2. 2008 年度冬学期

- ①新聞記事「思わず『へー』明治・大正期の記事・広告」朝日新聞 2008 年 11 月 29 日
- ②評論「ロハスブームは本物か」（『日本の論点 2008』福岡伸一）
- ③小説「鼻」（芥川龍之介）
- ④対談「脳を侵す環境ホルモン」（立花隆他）
- ⑤⑥⑦学生のブックレポート（後述）

3. 3. 前半の授業内容

前半授業は基本的に秋学期と同様であるが、教材のトピックは社会学、科学、評論などの領域に幅を広げた。2007 年度②評論「発明の対価」では全く正反対の二人の意見文を比較し、両年度で扱った「鼻」では芥川が「今昔物語」をどのように脚色変換させたかに重点を置いて読み、資料を分析、検討して自らの意見を根拠と共に述べられるようにした。

2008 年度①の新聞記事は、朝日新聞がデータベース化している明治・大正期紙面の記事の特集だが、「オレオレ詐欺」や「明治末の女性専用車両」など現代で問題になっている出来事や、逆に「ピストル販売」の広告など時代性を伺わせる記事もあり、学生に近現代史に関心を持たせ、現代を認識させるために良い教材であった。

3. 4. 後半—学生のブックレポート

3. 4. 1. ブックレポートの目的と意義

日本語使用の多様な背景を持つ個性的な学生に、一律の教材を使って読解授業を 1 年間続けていくことは、一人ひとりへの教育効果を考えたときに明らかに無理がある。指

導の照準の合わせ方が非常に難しいからだ。特に読解に関しては、文章をどこまで掘り下げて読むかという点では、教師の説明だけではなく、学生が文章から何を読み取り、如何に考察、検討し自らの意見をまとめ上げるかが非常に大事である。そのため、学生一人ひとりが自分の関心と実力に応じて、個人で教材を選択しブックレポートをするという作業が必要となる。

各人が責任を持って資料を担当して、キーワードを探し段落ごとや文章全体の要約をし、書き手の主張を正確に把握するという言語的な側面を学習し、内容について深く考え他の人と議論するという論理的思考や意識を構築する。その目的のためにブックレポートを取り入れた。

3. 4. 2. 2007 年度の資料

- 1 「カラダに今何が起きているか」他。斎藤隆『身体感覚を取り戻す』177～216 頁。
1～3 名
- 2 「おとぎ話の深層」河合隼雄『日本人とアイデンティティ』132～154 頁。2 名
- 3 「世界へ出て行く若者たちへ」緒方貞子『私の仕事』281～285 頁。1 名
「グローバルな人間の安全保障と日本」緒方貞子『私の仕事』237～245 頁。1 名
- 4 「脳死判定の落とし穴」村上陽一郎『生と死への眼差し』59～87 頁。2 名
- 5 「『菜の花』への眼差し」エリス俊子『新・知の技法』165～179 頁。1 名
- 6 「国際法と公正」小寺彰『知のモラル』33～48 頁。2 名
- 7 「危機のモラル」船曳建夫『知のモラル』193～208 頁。2 名
- 8 「ポップ・カルチャー」根元長兵衛他『文化へのまなざし』110～121 頁。1 名

3. 4. 3. 2008 年度の資料

- 1 「カラダに今何が起きているか」他。斎藤隆『身体感覚を取り戻す』177～216 頁。
2 名
- 2 「おとぎ話の深層」河合隼雄『132～154 頁。1～2 名
- 3 「グローバルな人間の安全保障と日本」緒方貞子『私の仕事』237～245 頁。1 名
- 4 「『奇妙なサル』に見る互惠性」長谷川寿一『知のモラル』175～193 頁。1 名
- 5 「『菜の花』への眼差し」エリス俊子『新・知の技法』165～179 頁。1 名
- 6 「国際法と公正」小寺彰『知のモラル』33～48 頁。1 名
- 7 「危機のモラル」船曳建夫『知のモラル』193～208 頁。1 名
- 8 「音楽のように生きる」茂木健一郎『すべては音楽から生まれる』102～133 頁。
1 名

3. 4. 4. ブックレポートの指導方法

ブックレポートの資料は、書物の一部か小論文を教師が用意し、学生には全ての資料に簡単に目を通して担当資料を選ばせた。長い資料は2～3名に割り当てたが、その場合も章ごとなどに区切り、独立して担当させた。担当資料が決定してから発表までの準備期間は約1ヶ月である。

発表に際しては、発表者が用意したレジュメを全員に配り、口頭で発表をする。発表の内容は、全体として書き手が主張したいこと、その論の根拠としてどのような論を展開しているか、その両方についての発表者の意見・感想の3点を組み込むことを課題とした。さらに時間が許す限り他の学生との質疑応答を行った。発表の仕方とレジュメの書き方は、前もって教師がサンプルを示しておいた。

なお、発表者以外の学生には資料を読ませないようにした。これは、発表者が口頭発表とレジュメの提示だけで、資料を読んでいない人に内容を十分理解できるように説明することも求められたためである。

実際の発表では、2007年度の学生は十分に準備をして内容理解から聞き手との意見交換まで積極的に取り組んだ。各人の発表は概ね成功したと言える。ブックレポートを通して読むことに自信がついたという学生が多かった。しかし、2008年度においては多くの学生の読み方が浅く、書き手の主張が捉え切れなかったり、正確に把握できても聞き手に伝えられない、或いは全く問題点が思い浮かばないという発表が目立った。この状態では意見交換も出来ず、発表者が進んで論点を見出して他の学生の発言を促すという形も作れないのは当然である。逆に聞き手の中に、個人的に非常に意欲のある学生が何名おり、発表者も教師自身も授業の進行を救われたこともあった。

両年度とも聞き手は各発表を聞いた後で、発表の要旨と内容の考察をワークシートとして提出した。この作業は真剣に発表者の話に耳を傾けるという点で成功だった。教師は学期終了後にブックレポートの総括として、発表時間中にコメントできなかった要点と他の学生の考察を簡単にまとめて記載したものを全員に配布した。各自はこのフィードバック用紙と教師による採点用紙を読み、自分の読解の正確さやクラスメート全員の様々な意見を最終的に知り、ブックレポート作業が終了する。

3. 4. 5. 指導上の問題点

上記のように2007年度と2008年度を比較すると、ほぼ同じ資料とやり方で進めたブックレポートであったが、学習効果という点で異なる結果が出た。2007年度の多くの学生と2008年度の一部の学生は、非常に難解な資料を一人で理解して発表し、読解の一般授業よりも深く勉強したという達成感を得たようだった。しかしながら2008年度は内容を正確に把握できず、考察、意見、質疑応答もうまく機能しない学生も多かった。

後者の学生の問題点は、まだ独力で資料を読み取る読解力がついていなかったことにあるといえよう。十分に時間をかけて読解に取り組み、書き手の主張を正確に把握した上で自分の考えを柔軟にまとめる訓練が出来ていなかったのだ。聞き手から、発表者が何を語ろうとしているか全く分からないという意見も出たが、これは伝える力以前の問題である。

小澤（1996）は、ブックレポートの際、「学生達にはまだまだ主張と構成を読み取る力が不足している」（p142）と述べているが、筆者も秋学期初めから読み物の構成や文章全体の書き手の主張を要約させる作業を続ける必要があることを実感した。

問題の第二点は、両年度とも学生は全資料を眺めて自らの資料を選択したとはいえ、各資料に多少難易度の差異があり、また自分の関心に沿っているかどうか充分見極める

ことが出来ないまま、担当を決定したことだ。学生の中に不公平さを感じる者がいるのも当然である。

最後に、評価は理解度、考察と意見、発表の際の話し方、レジュメの書き方にポイントを置いて採点したが、最も大切である理解が不十分であると、必然的に総合点が悪くなる。したがって学生の正確な理解を補佐する必要があり、発表前の個人指導が不可欠となるが、2008年度はこの点が全く不十分であった。

総合的に省みると、ブックレポートがうまく出来なかったと感じて自信を喪失しかねない学生にとって、教師主体ではない授業に意義があるかどうか再考の余地はある。しかしながら、成功した学生たちへの学習効果を考慮すると、無闇に平易な資料を準備したり、独立性を与えないという消極的指導では学生の自主性が育たない。ブックレポート実施においては、より一層の工夫が求められる。

3. 5. 学生からの評価

コースエバリュエーションによると、読解全般では両年度とも、色々なジャンルのものを読んで、大変だったが自分のためになったといった肯定的な評価が多かった。

ブックレポートに関しては、2007年度が「とても難しい内容のものを読んで理解したことによって自信がついた」や「少し緊張したが、うまくいってよかった。今後他の授業のプレゼンテーションに役立つだろう」、「大変だったが、いろいろ学んだ」など、ブックレポートの特性をよく理解している。一方2008年度は「ブックレポートの準備期間が短い」や「前もってディスカッションできるくらいの余裕がほしい」、「なかなか難しい」など、個人で苦しみ、自分では満足できない結果だと自覚するものが目に付いた。けれども、「一般の読解授業よりも楽しく自分に自信がついた」と述べた学生も何人かいた。

4. 春学期の授業内容

4. 1. 目的

授業で日本語を学習する最後の学期である。読解前半では難易度の一層高い資料を読み、後半では文学のブックレポートを行い、日本語学習の総仕上げをする。

4. 2. 授業前半で扱った教材

4. 2. 1. 2007年度春学期

- ①新聞記事「グローバル化の招待」(1) 朝日新聞 2008年3月24日朝刊
- ②新聞記事「グローバル化の招待」(2) 朝日新聞 2008年3月24日朝刊
- ③評論「ロハスブームは本物か」(『日本の論点 2008』福岡伸一)
- ④小説「私が、もう、聞きましたからね!」(『ゆるやかな絆』大江健三郎)
- ⑤⑥⑦学生のブックレポート(後述)

4. 2. 2. 2008 年度春学期

- ①小説「蜘蛛の糸」(芥川龍之介)
- ②新聞記事「ネットの功罪」朝日新聞 2009 年 1 月 8 日朝刊、朝日新聞 2009 年 2 月 6 日、日経新聞 2009 年 1 月 20 日夕刊
- ③学術書「毀れた循環」(『思想地図 Vol. 2』本田由紀)
- ④小説「私が、もう、闘いましたからね!」(『ゆるやかな絆』大江健三郎)
- ⑤⑥⑦学生のブックレポート(後述)

4. 3. 前半の授業内容

2007 年度は環境問題に力点を置き、学生自身の日常生活からグローバルな問題に至るまで様々な論点を見付け出し議論させた。世界的に環境問題への意識が高まっていた時期だったため学生の関心も深く、論理的な考えを組み立てる良い練習となった。

2008 年度は社会への関心が深い学生が多かったので、ネットが人間生活に及ぼす功罪や、本田由紀氏の「毀れた循環」を資料として日本社会の構造を歴史的に考察したが、一部の学生には難しすぎたようだ。

両年度とも最後に大江健三郎を読んだ。非常に難解ながら、作者の人生と作品との結びつきや作品の執筆意図を分析する良い練習となり、後半の文学のブックレポート取り組みへの橋渡しが出来た。

4. 4. 後半の授業内容—学生のブックレポート

4. 4. 1. 春学期のブックレポートの目的

冬学期でブックレポートを採用した結果、非常に遣り甲斐があったという学生も、反対に上手に出来なくて残念だったという学生も両方見られた。いずれにしても、是非もう一度試みたいという声が多かったので、再びブックレポートを取り入れることにした。

春学期は、日本文学を読み鑑賞し批評するという課題にした。日本文学を課題とした理由は 2 点ある。まず第一に、春学期に学生は書き方のクラスで論文作成に取り組むため、論文に関わる参考文献を多く読むことが想定される。よって読解のクラスでは、敢えて学術文ではなく、文学という異なるジャンルの本に挑戦させたいと考えた。

第二に、文学は人間の生き方を語るものであるからして、特別日本語の一年間に渡る読解授業の最後に是非とも文学を読んで、日本語の文章を学びながら人間や文化について深く考えてもらいたいと思ったからだ。水村美苗は『日本語が亡びるとき』で「日本の国語教育は日本近代文学を読み継がせるのに主眼を置くべきである。」と語っているが、日本語の表現の多様性や書き言葉を学ぶには日本近代文学は最適である。また、学生たちが今後心豊かに成長を続けるためにも、読書への深い関心を持つきっかけを作ってもらいたいと考えた。なお、国際バカロレアでは文学教育に力を置いているが、その「ねらい」の最後には「生涯にわたる文学への関心を育てる」(田口 2007) とある。文学は様々な能力や知識を身につけるだけでなく、豊かな心や精神を育む力がある。

4. 4. 2. 2007 年度春学期の担当作品

文学作品

「雪国」(川端康成)「こころ」(夏目漱石)「それから」(夏目漱石)「ビルマの豎琴」(竹山道雄)「海と毒薬」(遠藤周作)「深い河」(遠藤周作)「二十四の瞳」(壺井栄)「指揮官たちの特攻」(城山三郎)「手紙」(浅田次郎)「火垂るの墓」(野坂昭如)「走れメロス」(太宰治)「美神」(三島由紀夫)「蜘蛛の糸」(芥川龍之介)「銀河鉄道の夜」(宮沢賢治)

4. 4. 3. 2008 年度春学期の担当作品

文学作品

「沈黙」(遠藤周作)「走れメロス」(太宰治)「坊ちゃん」(夏目漱石)「こころ」(夏目漱石)「羅生門」(芥川龍之介)「野火」(大岡昇平)「銀河鉄道の夜」(宮沢賢治)「佐賀のがばいばあちゃん」(島田洋七)「蛇にピアス」(金原ひとみ)「ホリーガーデン」(江國香織)「K Y O K O」(村上龍)

学術書、研究書

「ドラえもん秘密」(世田谷ドラえもん研究会)「IPS細胞」(八代嘉美)「株式投資の科学」(鈴木勘一郎他)

4. 4. 4. ブックレポートの指導方法

担当作品は 2007 年度、2008 年度とも、教師が日本近代文学の推薦図書のリストを作り作品を紹介したが、学生の自由な選択を受け入れ、その他の作品でも良いことにした。2007 年度は日本文学に限定し、推薦図書の一覧にない作品を学生が希望した場合は、授業に適切な作品かどうか教師が事前に検討し、不適切だと判断したら変えさせた。しかし、2008 年度は自由な発想・考察・分析を期待して出来るだけ学生の自主性に任せて本を選ばせた。結果的に、文学と言えるか疑問符がつく作品も、文学は好きではないと言う学生の希望で学術書(新書)も受け入れた。

レポートは一人 20 分で、エッセイ形式のレジュメを当日全員に配布したうえで、発表する。以下の 4 点を必ず入れることを前提にしたが、作品の内容によって力点を入れるところは自由とした。

①作家の生涯や作風の検討。(学術書の場合はテーマの背景)。

②当該小説のあらすじと鑑賞。(学術書の場合は書物全体の内容と焦点をあてた部分の精読)。

鑑賞は、内容・構成・技法・文体全てを考察した上で、自分が特に感じたことに重点を置き、自らの解釈で文学批評をする。テーマが類似の他作品を読み比べて比較してもよい。

③部分の朗読。

作者の意図や登場人物の気持ちを理解して、上手に音読する。

④質疑応答。

皆で議論したい点を自ら考え、他の学生からの質問に対しては説得力のある応答を

する。

以上を課題とした発表と⑤エッセイ（レジュメ）提出で、文学研究の考察力と表現力を磨いてもらい、採点もこの基準で行った。

なお発表を聞く学生たちには、書物の感想と発表者への評価を無記名で書いてもらい、各人に渡すことにした。

4. 4. 5. 指導上の問題点

春学期も冬学期と同様、2007年度と2008年度では学習効果にいくらかの差異があった。2007年度は、各学生とも非常に深い考察を経て発表に臨んだ。発表の課題4点にも丁寧に取り組んでおり、結果的に高い評価を与えることが出来た。聞き手の学生も各学生の発表に深い関心を持って内容を聞き大変活発に質疑応答が出来てよかった。そして、この授業以前には日本語で日本文学を読んだことのない学生も多かったのだが、自らの担当作品を読んだり、友達の発表を聞いた後に、もっと様々な文学を読みたいという意見が多く出た。

2008年度は担当作品を全く自由に学生たちに選ばせたので、学生個人の実感としては教師の強制力や難解さに苦しむことはなかったようだが、逆に表面的で浅い読解が多かった。しかし、自由な解釈とはいえ、あまりに的外れでは本来の文学鑑賞の目的が達せられない。担当作品は推薦図書以外であれば教師が入念に検討し、学生の鑑賞過程を把握して、必要であれば鑑賞の最中にキーワードを提出させるなり着目すべき場面に關して質問を投げかけるなりして適切な指導をしなくてはいけない。学術書を扱った学生の発表には総じて表面的な考察が多く、無理にでも文学に挑戦させなかったのは失敗だった。

また、2008年度は音読が上手にできなかった学生が多い。内容や登場人物の心を深く理解していないからだが、声に出して読む練習が不十分だったことも原因にある。一般の読解授業の中で音読指導に十分力を入れるべきであった。

自由でありながら論理的な考察・分析をするためには、2～3人のグループを作って担当させ、十分な話し合いをさせてから発表させる形態も考えられる。学生は自らの考えを説明したり討論することで言語能力を伸ばし作品理解をもさらに深めるからだ。

津田は「継承語学習者の日本文学の流れの内容理解は自己の歴史上における位置の確認である」(2003)と述べ、作品内のトピックを学生自らの状況に当てはめさせたり時代を移して寸劇を演じさせる指導も行っている。グループによるブックレポートであれば、文学鑑賞は豊かさを増し学生の自分への意識も高まるであろう。

いずれにしても、文学を論理的にしかも優れた解釈で批評する力を養うことは非常に高レベルな作業なので、指導する教師は十分な教養と感性を保持する必要がある。教師自らが読書を重ね、研究会に出席してより良い指導方法を考えるなど、相当な努力を覚悟せねばなるまい。

4. 5. 学生からの評価

2007年度の学生からは「文学に対する興味が持てた」という声が多く聞かれた。

2008年度の学生からは様々な評価があった。コースエバリュエーションによると、「もっと色々な文献を読めたらいい」、「新聞をもっと読みたかった」、「良い勉強にはなったが、もっと難しい内容で勉強したい」などの批判。一方、「考察力が深まった」、「教養が高まった」、「とても充実していた」、「大江まで読めた」、「ブックレポートで他の学生の発表が楽しかった」、「今学期が一番充実していた」など肯定的な評価もあった。学生の指摘を総合的に検討すると、まだまだ難易度の高い文章や広範囲なジャンルやトピックに挑戦したいという気概が潜んでおり、教師が実感していたより深い向学心を持っていたのだった。

5. まとめと今後の課題

特別日本語Aクラスはスタート時点でB、Cクラスより多くの日本語学習を要求されるが、「大学生或いは社会人の日本語母語話者として必要な運用能力を会得する」という最終目標は全クラス同一の到達点である。そのため、学生は精神的にも肉体的にも非常に苦勞して1年間の授業と向かい合う。教師は学生全員がこのような相当な学習時間と絶え間ぬ努力を求められていることを常に意識する必要がある。

教材選択においては、様々なジャンルの中から出来るだけ平易な文章の読み物から始め、次第に難易度を上げていくようにして、学生に過度な負担をかけてはならない。常に学生と語り合ったり時にはアンケートをとったりして教材選択の参考にすることが必要である。しかしながら、クラスの目標達成の為に総合的には教材のレベルは決して落とすべきではない。学生たちは知性と意欲に溢れており、学力向上のための苦勞は厭わぬはずだと考える。

学生の個人差克服は大きな課題である。資料を読んだ後に毎回要約を書かせること、疑問点、感想、対処法などを口頭、或いは記述で表現させることにより各学生の問題点を把握し対応することが出来る。しかし、実力的に授業の進度についていくのが苦しい学生には動機付けや表面的な指導ばかりでなく、根本的な対処法を工夫せねばならない。授業以外の個人的サポートには限界があるので、例えば表現文型の教材を使用するなり、平易な新聞記事を日課として読むことを課題とするなりを、従来の授業と並行して行うことも考えられる。そのためには具体的に綿密な計画と構想を練る必要があろう。

教師自身が適切な指導が出来るよう学び続けながら、熱意と配慮を持って各学生の力の不足面を補い、その豊かな発想力や知識の応用力を伸ばす指導を目指すことに重要な意味がある。

参考文献

- 井下千以子 (1999) 「帰国生のための日本語教育—大学における言語技術教育として—」
『SFC 日本語教育』慶應義塾大学湘南藤沢学会
加藤周一 (2000) 『読書術』岩波書店
相良憲昭・岩崎久美子 (2007) 『国際バカロレア 世界が認める卓越した教育プログラム』

赤石書店

佐藤郡衛（1997）『海外・帰国子女教育の再構築―異文化間教育学の視点から』玉川大学出版部

田口雅子（2007）『国際バカロレア 世界トップ教育への切符』松柏社

津田和男（2005）「米国国際学校での継承語日本語―内容重視の観点から」

<http://www.mhb.jp/2005/08/>

根津真知子・半田淳子・平田泉（2009）「言語教育の普遍性と個別性―日本語教育と国語教育」『ICU日本語教育研究5』国際基督教大学日本語教育研究センター

平野啓一郎（2006）『本の読み方 スロー・リーディングの実践』PHP 研究書

廣瀬正宜・中村一郎・小澤伊久美・丸山千歌・中川健司（1996）『ICU 帰国本科生に対する日本語教育プログラム開発に関する研究：スペシャル・ジャパニーズ カリキュラム検討報告』国際基督教大学日本語教育研究センター

水村美苗（2008）『日本語が亡びるとき―英語の世紀の中で』筑摩書房